

AJEQ News Letter

Association japonaise des études québécoises

日本ケベック学会ニュースレター

2014年新春特別号
小畑精和先生追悼特集
第4巻 第4号
2014年1月15日発行

小畑前会長への追悼

ご存じのように、日本ケベック学会(AJEQ)初代会長の小畑精和先生が2013年11月22日に逝去なさいました。2年半前にご病気が見つかったから仕事ぶりは衰えず、むしろますます研ぎ澄まされていくようで、ご快癒を祈念していた矢先でした。

私が小畑先生に初めてお会いしたのは2004年初夏、東京6大学の国際交流関係者たちの集まりにおいてだったと思います。愛読していた『ケベック文学研究』の著者に思いがけぬ場所での出会い、偶然に感謝した覚えがあります。その後も仏文学会などでお会いする機会があり、2008年秋にAJEQが設立されることになったときには設立準備委員の1人として参加させていただきました。学会発足当初はほぼ毎月理事会がありました。が、(皆、新しいものをつくり出す素朴な喜びを味わっていたのでしょう)昼間の仕事の疲れも忘れて夕方からの会議に参加したものです。お陰様で、6年目を迎えた学会運営はだいぶ安定してきて、研究会も定期的に開催できるようになりました。

AJEQの活動以外にも、国際フランコフォニー学会(CIEF)の大会に3回ご一緒させていただきました。とくに昨年6月のモーリシャス大会では、治療の直後だったにもかかわらず、自身でコーディネートした「文学における島嶼性」に関するセッションで発表なさり、絶妙なユーモアで聴衆を沸



かせていたのが印象的でした。明治大学で長年担当されていた「ケベック講座」にも何度か伺いましたが、毎回多彩なゲストが登場し、とても刺激的でした。

そして昨秋、日ケ交流40周年を記念して出版された『遠くて近いケベック』(御茶の水書房刊)では編集委員長を務めてくださいました。入退院を繰り返しながらの編集作業はご苦勞も多かったはずで、今思えば渾身の力を振り絞っていたのでしょ。みなさまもぜひご一読ください。

小畑先生はこのほかにもじつに広範な活動をなさっていました。その遺志を継ぐのは並大抵のことではありませんが、われわれとしてまず重要なのは、AJEQをケベック研究の拠点として今後も力強く発展させていくことです。先生のご冥福をお祈りするとともに、これからもAJEQの活動を遠くから見守っていただけるようお願いしたいと思います。

日本ケベック学会会長 小倉和子

● 本号の内容 ●

小倉会長追悼文・・・1 / 会員からの追悼文・・・2 / 海外からの
悔やみ・・・5 / 小畑精和先生の足跡・・・6 / 編集後記・・・8



ケベック学会会員からの追悼文

ケベック文学研究者、教育者として活躍なされた小畑先生への追悼文を、ケベック学会会員、学生会員の方々からご寄稿いただきました。

小畑君追悼

2014年が貴方への追悼文ではじまろうとはあまりにも悲しい。61歳という早逝で、これからどのように集大成されていくのか、私は少し先輩ですので本当に楽しみにしておりました。あの一見怖そうな雰囲気、ちょっと言い過ぎかもしれませんが。しかし、実に味わいの深い人間・小畑は魅力的な存在でした。公私にわたり20有余年の間、密なお付き合いをしてきましたので、思い出は次々に浮かんでまいります。

小畑君と共に立ち上げた事業も少なくありません。明治大学ではカナダ研究講座やカナダ研究所の開設、国際要素の極めて少なかった大学を国際化する戦略の構築を共に進め、その一環としての国を巻き込んで日加戦略的學生交流プログラムの設置や日仏共同博士課程プログラムの再構築を行い、アジア初のケベック文庫（明治大学中央図書館内）の開設など、今考えても澁刺とした日々を共におくることができたことを光榮に思っています。研究者としての小畑君はすでに高く評価されており、斯学の中でも稀に見る裾野の大きな学者でありました。

小畑君が逝かれ、トロント大学の私の研究室によく訪ねてこられ、ヨークヴィルでCanadianというブランドのビールを飲みながら研究や社会のことを熱く話をした10年前を思い出します。お互いに元気で、張り切っている様子が写真から見て取れ、一層寂しさが増します。



Canadianビールを手にする小畑先生

亡くなる何日か前まで電話やメールをくれ、ある日の電話の際に、以前より声が良くなっているように感じましたので、そのように伝えましたら、本当にガラガラ声で喜ばれ、私も安心していましたが、これがお別れになってしまいました。今は、ただご冥福をお祈りするのみです。

明治大学 藤田直晴

小畑さん、ありがとうございました。

あれは2012年7月末、明治大学で「日本カナダ文学会30周年記念大会」を開催した時でした。大会終了後、治療状況を訊ねると、「身辺整理をしなければ」、とおっしゃったときのあなたの眼差が今でも思い出されます。それから1年数か月後、あなたは帰らぬ人となってしまった。無念です。

あなたと私は実に多くのことを一緒にやってきました。日本カナダ文学会の仕事はもちろん、自分たちの専門から、英語系カナダ文学、仏語系カナダ文学とおのずと役割分担をして、文科省の科研にも参加させていただいた。また、あなたが編集責任者であった『新日本文学』にも寄稿させていただいた。講演会もたくさん一緒に企画しました。多くのカナダ作家たちと居酒屋にも行きましたね。



大学の授業、役職のみならず、「日本カナダ学会」、「日本カナダ文学会」、「日本ケベック学会」等、役員、副会長、会長としての仕事、そして伝統ある明治大学ラグビー部の顧問として実に様々な任務をあなたはこなされてきました。そんな激務のなか、何冊もの本も出版されてきた。海外出張も多かった。今思うと、どのようにして仕事をこなされてきたのかと。能力があり、エネルギーで、頑張り屋のあなただったからこそできたのです。そう、電話で語るときは、いつも真夜中でしたね。それも長電話になって。あなたを捕まえることが可能なのはいつもそんな時間帯でした。

あなたの偉大な実績は、あなたのご家族、弟子さんたち、そしてカナダにかかわる私たち研究者たちに受け継がれていきます。そして何よりもあなたが遺された功績は、ケベック文学を日本で広めたことです。そのパイオニアであったことです。

日本カナダ文学会会長 佐藤アヤ子

小畑先生とフランス語教育

突然の小畑先生の訃報に心からのお悔やみを申し上げます。数年前からご体調がすぐれないことはお聞きしていましたが、これからが自分の集大成の時期とおっしゃっていた小畑先生のご無念がいかばかりであったかと思うと、言葉になりません。

小畑先生とはじめてお会いしたのは今から20年ほど前になります。小畑先生は当時ケベック文学の読書会を立ち上げられ、小生にも声をかけてくださいました。ケベックの文学作品はそのころはかなりマイナーでしたが、勉強会のメンバーで認知度をあげていこうという熱気があったことを今でもよく覚えています。

フランス、カナダ、ケベックの文学や社会事象に関する小畑先生の幅広く、同時に深い知識と洞察は周知のことですが、小畑先生はそれと同時にとても優れたフランス語教育者でもありました。幸運にも2002年と2011年に駿河台出版社よりフランス語の2冊の初級文法のテキスト作成をご一緒させていただく機会に恵まれました。テキストの2つの大きなコンセプトを熱心にご説明くださったことは記憶に鮮明に残っています。「フランス語の初級文法はただ練習問題だけをやっていてもなかなか自分のものにはならない。真の理解には学習した文法事項をふまえた和文仏訳が欠かせない。自分で文章を作ることができるということは文構造と文法を正しく理解しているということだ」「簡単な文章をフランス語で作れるということは、フランス語にたいする苦手意識をなくすと同時に、フランス語で少し話せるようになるということだ」

この2冊のテキストの練習問題はそのほとんどが和文仏訳で構成されており、第二外国語としてのフランス語教育への小畑先生の思いがつまっています。小生にとって忘れられない2冊です。

最後に今一度小畑先生のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

拓殖大学 寺家村博



モントリオール大学で特別講義を行う小畑先生

小畑先生の言葉を胸に

2008年カナダ大使館の講演における小畑先生との出会いは私のケベック文学研究人生の始まりでした。その時、ジル・ヴィニョーなどの歌を通して先生が話されたケベック文化やケベック語についての内容に夢中になったのを憶えています。以降、小畑先生からはフランス語を学ぶ意味を、ケベックのおもしろさを、文学のたのしさを、そして研究者である責任を幾度も教えて頂きました。全てに共通して小畑先生は「教養」が人々にもたらす豊かさを強く説いておられました。「教養はすぐには役に立たない。けれどすぐに役に立つものはすぐに役に立たなくなる。すぐに役に立たないものは長く役に立つ」と。便利なものや流行を追いかけがちな今の時代、このことば以上に心に響くことばがあるでしょうか。小畑先生は自身の信念と哲学をお待ちでした。

私がテキスト分析に不安なとき小畑先生は「解釈は合ってなくてもいい、とにかく説明しなさい」と、いつも私の感性を信じて下さいましたし、私は自分の直感を信じて歩むことができました。学会発表について「発表するならウケを狙え」と言われた、その時の小畑先生の愉快的笑顔が恋しいです。小畑先生は自身のことばとエスプリをお持ちでした。もっともっと指導して頂きたかったです。もっともっと小畑先生の下で成長し恩返しをしたかったです。

小畑先生のお側で研究できた5年間光栄でした、本当に幸せでした。私が研究で躓くとき、あらゆる小畑先生のことばは私の支えでしたし、今も、これからも支えであり続けます。小畑先生、ありがとうございました、ご冥福を心よりお祈りいたします。

明治大学大学院 佐々木菜緒



ゼミの授業の後で。
小畑先生と佐々木さん（右）

大好きだった小畑先生へ

小畑精和先生との出会いは2006年夏。明治大学の語学研修にて、トゥールーズで一ヶ月間一緒に過ごしたのが始まりだった。気さくな小畑先生は、皆と親しくして下さいました。以後、大学ですれ違う度に「よお愛ちゃん！」と笑顔で声をかけて下さいました。そのときの縁で、私はケベック研究に導かれることになった。博士課程から小畑先生に直接師事するため、2011年同大学教養デザイン研究科に入学した。小畑先生の長い教員生活の中で、博士の学生第一号が私だ。光栄である。

だが思えば、酒好きな小畑先生と一緒にお酒を飲んだのは、トゥールーズの日々が最初で最後であった。博士入学のわずか一ヶ月後、小畑先生のご病気がわかったからだ。この3年間、小畑先生と過ごした時間は数えるほどしかない。それでも小畑先生は、私たち研究室の学生をいつも気にかけて下さいました。入院中もよく連絡を下さり、ご指導下さいました。お見舞いの折には、治療方法について説明を下さった。先生の教え子として、本当に大切にしてもらった。



海外(ケベック・韓国)からのお悔やみ

小畑先生との「客観的偶然」な出会い

2014年の年始に、昨年亡くなった小畑先生を思い出し、寂しさを感じます。2013年に病室で小畑先生に会う機会がありましたが、こんなにも早く亡くなるとは思っていませんでした。小畑先生が亡くなったことに対する喪失感はいくらにも大きく、まるで日本とケベックの間にあるベーリング海峡が消えてしまったかのようです。もちろん、これは例えですが、小畑先生なくしては、日本とケベックの関係は現在のようなものではなかったであろうと思います。先生は、ケベック研究のパイオニアとして、日本ケベック学会を設立し、日本とケベックの間の交流を活発にしました。また、日本とケベックの交流の豊かさは、一方通行ではなく、先生は私に、東京にいる二人のケベック人アーティストを紹介してくれました。そして、ケベックですら会うことのなかった3人は、昨年10月に東京で再会しました。これは「客観的偶然」と言えると思います。これはまた、私と小畑先生の出会いについてもそうです。今から15年ほど前に、先生がモントリオールを訪れた際に、私と小畑先生は出会いました。先生なくしては、日本文化の扉は私に対してこんなにも大きく開かれることはなかったでしょう。そして、先生がいなければ、安っぽい観光客向けのガラス越しにしか日本を見ることができず、内容のある作品を書くことはできなかったでしょう。ですから、最後に「小畑先生ありがとう」と心からのお礼を言いたいと思います。※

Ook CHUNG (ケベック作家)

※原文はフランス語。(翻訳：山出裕子)

闘病生活のはじめの頃、小畑先生が教えてくれた。癌細胞切除は、声を失うかもしれないからやめたと。先生はなぜ、声帯維持にこだわっていたのか。小畑先生の闘病三年間をみつめて今思う。小畑先生にとって、生きることは話すことだったのではないか。人と人を結び、日ケを結び、フランコフォニーを駆け回り、そして小畑先生を取り巻く人々とコミュニケーションをとることが、小畑先生にとって、命ある限り続けたいことだったのではないだろうか…。

大好きだった小畑精和先生。これまでどうもありがとうございました。どうか、もうゆっくりお休み下さい。小畑先生のご冥福を心よりお祈り致します。

明治大学大学院 仲村愛



国際フランコフォニー学会で発表する小畑先生(2012年6月ギリシャにて)
左：ルーシー・ルカン教授(コンコルディア大学) 右：ジル・デュピユイ教授(モントリオール大学)

小倉会長あてに送られてきた海外（ケベック・韓国）からのお悔やみが、12月21日（土）の「小畑先生を偲ぶ会」で紹介されました。そのうちの一部を抜粋して、皆様にご紹介いたします（日本語訳は小倉会長によるものです）。

東京に戻ってからも先生のケベックへの愛は消えず、日本におけるケベック研究の発展にすばらしい貢献をしてくださいました。そして、ご家族や同僚、学生や友人たちは、この恐ろしい病気にたいする彼の勇気と忍耐から多くのことを学んだと思います。— Claude-Yves CHARRON（ケベック州政府在日事務所前代表）



小畑先生とシャロン前代表

今となっては、彼の名と私たちの美しい友情をケベック文学の中に刻みこんだことで自分をなぐさめるしかありません。彼を登場人物とし、東京が舞台になった近著を彼に捧げました。精和は私の作品の中で生きつづけるでしょう。— André GIRARD（ケベック作家）

今日、悲しい日曜日は一日中雨が降っていました。雨の中、自宅の周辺を散歩しながら、精和のことを考えました。彼のことをとても愛していたので、一生忘れることができないでしょう。今晚ぼくは、忘れることのできないすばらしい友である精のために祈ります。悲しみとともに— Daekyun HAN（韓国ケベック学会前会長）

小畑精和先生とケベック ご研究の足跡

小畑先生の精力的なケベック文学・文化に関するご研究の足跡を、代表的な著書や受賞歴を中心に、早足で振り返ります。

1998年

『やあ、ガラルノー』 ジャック・ゴドブー著、小畑精和訳、彩流社。



ケベックのフランス語を大阪弁で翻訳した画期的な翻訳書。ケベックの独特なフランス語を、日本語の標準語と大阪弁の違いとしてとらえ、日本の読者にケベックのフランス語の感覚をわかりやすく伝えています。

1998年

北米フランス語の普及功労賞受賞。

北米のフランス語フランス文化の普及や紹介に貢献した人物を、カナダ・ケベック州政府フランス語局が毎年表彰している制度で、1978年に時の首相ルネ・レベックが創設しました。小畑先生は、賞創設20周年記念の際に受章され、アジアから初の受章でした。



2003年

『ケベック文学研究—フランス系カナダ文学の変容』小畑精和著、御茶の水書房



ケベック文学の歴史を開拓時代から近年の移民文学の時代まで丁寧に読み解いた日本で最初の本格的ケベック文学研究書。2003年度カナダ首相出版賞審査員特別賞受賞作。

2008年

日本ケベック学会設立。初代会長。



学会設立のために奔走された小畑先生のご努力の甲斐あって、2008年10月に日本ケベック学会発足大会が開催され、大成功を収めました。「日本学術会議協力学術団体」の一つになることがケベック学会設立以来の先生の悲願でしたが、要件を満たすまであと一歩です。6年目を迎えたケベック学会は、先生の悲願に向かって着実に発展しています。

2009年

『ケベックを知るための54章』小畑精和・竹中豊 編著、明石書店。



ケベックの歴史から日常生活に至るまで、54の視点でケベックについて紹介した逸書。多くの大学図書館に蔵書され、ケベックについて勉強する学生たちの必携の書となっています。小畑先生は、ケベックの文化や文学について6つの章を執筆されています。

2013年

『カナダ文化万華鏡—「赤毛のアン」からシルク・ドゥ・ソレイユへ』小畑精和著、明治大学出版会。



小畑先生の遺作となる書。カナダの多文化主義を一貫して小畑先生らしいケベックの視点で論じています。「あとがき」では、病気に立ち向かう小畑先生の力強い精神力が伺え、是非、皆様にご一読いただきたい一冊です。

2013年

『遠くて近いケベックー日ケ40年の対話とその未来』日本ケベック学会日ケ交流40周年記念事業編集委員会編、御茶の水書房。



ケベックと日本の40年の歴史を振り返り、また、ケベックと日本のこれからについて論じた、ケベック州政府在日事務所創設40周年を記念する書。小畑先生が編集委員長を務められ、「編集長のご尽力なくしては完成しなかった」（小倉会長談）渾身の一冊。

●本号1ページ目の背景写真 「雪景色のプラトー・モンロワイヤル」（仲村愛会員撮影）



●編集後記●

小畑先生に初めてお目にかかったのは明治大学3年の時のケベック文学講読の授業でした。翌年、ケベックをテーマに卒論を書こうとすると、先生はモントリオール大学にて在外研究中でいらしたため、卒論指導を受けにモントリオールまで行きました。あれから20数年が経ちますが、私とケベックを引き合わせ、その魅力を教えて下さったのは小畑先生でした。先生のケベック研究における大きな功績をしっかりと受け継ぎ、日本におけるケベック研究のますますの発展のために、頑張っていきたいと思います。また、お忙しい中、ご寄稿いただきました執筆者の方々にお礼申し上げます。

（山出）

日本ケベック学会（2014年1月現在）

●主要役員

小倉和子（会長）
立花英裕（副会長）
C・ドゥロンジエ
（顧問・ケベック州
政府在日事務所代表）

●広報委員

宮尾尊弘
小松祐子
安田 敬
山出裕子
D・シッシェ

AJEQニュースレター

年3回発行

発行人・小倉和子

編集人・山出裕子

日本ケベック学会

